

謹賀
新年



いわき市

農業委員会だより

編集・発行 いわき市農業委員会

2022

令和4年1月1日発行

No.191

〒970-8026
いわき市平字堂根町4-8
TEL.0246(22)7534
FAX.0246(22)7538



年頭ごあいさつ



いわき市農業委員会
会長 草野 庄一

2022年の新春を寿
ぎお慶びを申し上げます。
皆様には、昨年とはま
た違った心境で新年を迎
えられた事と思います。
コロナで終始した日常
生活の全てが閉息状態の
1年でしたが、国の懸命
なワクチン接種の努力に
より感染者減少の状況下
での年越しでした。

しかし、時は留まる事
は無く昨年7月、改正後
2期目に当たる第17期農
業委員・農地利用最適化
推進委員として新たなス
タートを致しました。

幸いにも前期に引続き
会長再任の拜命を頂き、
身の引き締まる思いと過
去の無念を良い経験と捉
え、農業委員八期二十五
年の集大成として全身全
霊を傾注する覚悟です。

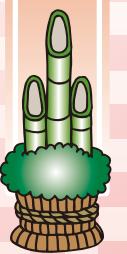
戸惑いと疑問を感じな
がらの新体制3年間の業
務遂行でしたが、今にな
り「農地を守る国策」の
為に農業委員と推進委員

の二体制にした国の方針
が理解できた気がする。
それを使命と捉え、優
良農地の更なる活用は勿
論、就農者の減少と高齢
化による「遊休農地解消
対策」を最重要課題とし
て委員一丸となつて取り
組みます。

その為には、市、農地
中間管理機構、土地改良
区、JA等の関係機関と
の連携が必須であり、そ
の強化に努めて参ります。
これまで農地利用最適
化推進委員が、市内の農
地の利用状況と農家の意
向調査実施の結果、遊休
農地の実態と担い手が見
つからず将来の営農に不
安を抱いている集落の実
態が浮き彫りになった。

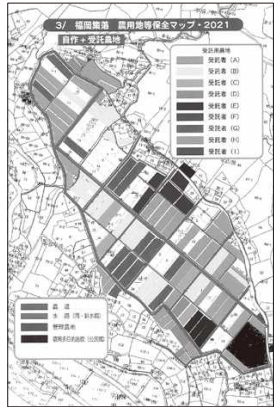
その為には二体制にな
った農業委員と推進委員
が現場活動を通じて受け
手と出し手の情報を基に
した「集落マップ」の作
成による、「集落話し合
い」を実施し、「人・農
地プラン」の策定・実質
化に努めます。

自ら志願し、任命を頂
いた使命を委員の責任と
自覚し行動して参ります
ので、皆様方のご理解と
ご協力をお願い致します。



集落の未来設計図

「人・農地プラン」で地



そこで草野委員は、集落内の受委託の現状を委託者ごとに地番に色分けし、誰が耕作しているの一目で判るようにした。

また、平成29年には、将来の営農意向を把握するためにアンケート調査を行い、現状をグラフ化し集落皆で、今後を考える機会となった。

今の耕作状況、そして将来の福岡集落の姿が見えてきたことで、危機感を共有することができた。

地図を作って「見える化」

農地の保全管理には、担い手の高齢化や後継者不足、米価格の低下など様々な課題を抱える。

これから5年後、10年後の農地はどうなるのか、不安がつゆる。

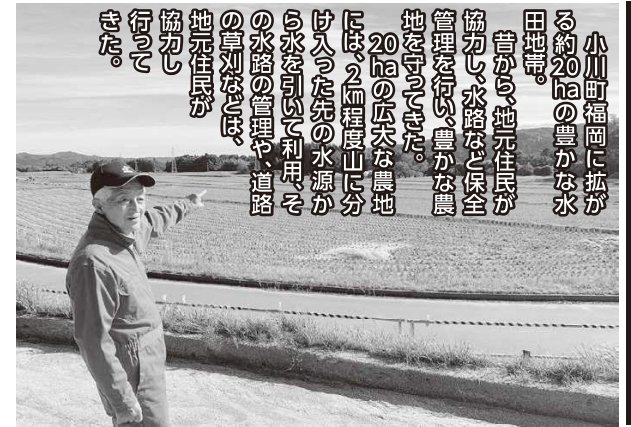
平成27年、基盤整備から40年以上が経ち、先人から受け継がれた農地を次代に引き継ぐため、これからの福岡地区について地域住民と話し合いを始めた。

しかし、今のような危機感を持つことは難しく、どこか他人事のようになってしまう。

次代に引き継ぐために

域農業の未来を考えてみましょう！

草野庄一委員(農業委員会会長)の挑戦



先人に日々感謝

小川町福岡に広がる約20haの豊かな水田地帯。

昔から、地元住民が協力し、水路など保全管理を行い豊かな農地を守ってきた。

20haの広大な農地には、2km程度山に分け入った先の水源から水を引いて利用その水路の管理や、道路の草刈などは、地元住民が協力し行ってきてきた。

地道な取り組み

草野委員は、20年以上前から、福島高専の先生などの協力を得て、農地・水環境保全事業「福岡・環境を守る会」として、水質の保全や生態系保全、景観・生活環境保全に取り組み、子供たちと生き物観察会などをを行い、地域住民と一緒に、地元を知り、環境を学ぶ活動を行ってきた。

子供が参加することで、自然と大人も参加し、住民同士の繋がりが強くなった。

視察研修で集落の良さを再認識

先進地の優良事例を研修視察する取り組みとして、千葉県鴨川市の、都会に一番近い棚田「大山千枚田」や西会津の中山間直払い活用優良集落「出戸集落」の事例を参加者を募り実施した。

直に現地を見、話を聞くことで、問題意識を共有し関係性を強めることでさらに活動の活性化に繋がりを、福岡集落の恵まれた環境を逆に再認識したと話す。

危機感の今が話し合いのチャンス！

数年前までは何とか成っていた。

数度の役員会で県・市・中間管理機構の担当者足に足を運んで頂き「集落営農」や「人・農地プラン」の説明を受けたが理解に苦しんだ。しかしここ1、2年、高齢化による、耕作断念者が増加し危機感が広まり将来への不安が助長し、「何とかしなければ」の考えになってきた。

そのタイミングでの「集落話し合い」は非常に効果的、継続的に話し合いを続ける事で問題意識が共有出来、集落の合意が形成された。

福岡地区の「人・農地プラン」の特徴

福岡地区の「人・農地プラン」は、「中山間直接支払い制度」を活用し、共同で草刈りや水路の管理を行うこと、そして、約20haの農地を、複数の担い手で請け負うことで、万が一営農が困難になった場合に、広大な農地を手放すことがないようにしている。

地域住民が全体で農地を守るという仕組みが特徴だ。

将来に回ける

福岡地区では話し合いの開始から約5年、「中山間直接支払い制度」を活用した環境保全に取り組みの合意を得て、人・農地プランが作成された。

何度も困難に直面する中で、草野委員の情熱が実を結んだ。

「耕作放棄地をゼロにしよう」という自分の部族は自分達で守る」という理念をもとに、地域住民皆で考え出した大きな結論だった。

草野委員は、将来について、「広域農道の完成で人の流れが変わる。クワインガルテンや都市住民が農業に興味を持ってもらえるような事業ができれば」と語る。

また、「人・農地プラン」の作成はゴールではない、今後も継続して話し合いを続けていくと先人が守ってきた福岡地区を次世代に引き継ぐ活動に意欲を燃やす。

人・農地プランって何？

「人・農地プランとは」、農業従事者の高齢化や後継者不足、耕作放棄地の増加など地域農業の問題を解決するため、みんなで話し合い、まとめる「集落の未来設計図」です。

集落説明会の開催

アンケートの実施

概ね、5年から10年後の農地利用に関するアンケート調査などを実施。

地図による現状把握と原案作成

アンケートの結果や図面をもとに「人・農地プラン」の原案を作成していきます。

農業委員会が実施している利用状況調査や利用意向調査の結果等も参考にします。

集落の合意



人・農地プランのお問合せ

人・農地プランは、地域農業の未来にとって非常に大切な取り組みのひとつです。

市では、農業委員会をはじめとする関係機関と協力しながら、人・農地プランの作成に向けた支援、集落営農や環境を維持していくための制度の活用などを説明しています。ご不明な点は、お気軽にお問合せください。

いわき市農林水産部
生産振興課 担い手支援係 **22-1148**

今年の表紙から

お正月に注連縄(しめなわ)を飾るのは歳神様を迎えるにあたって邪気を祓うため。取材に訪れた時は、最需要期であるお正月を前に、注連縄作りが佳境に入っていました。

訪問先は山田町の本郷芳則さん(54)。市内有数の注連縄製作者です。祖父の代からの家業を継ぎ、現在大小合わせて年間9千本の注連縄、15万本の輪宝を市内外に出荷しているほか、近隣神社の大きな注連縄や30種以上の飾りも作っています。

伊勢錦という稲【写真】が注連縄に適しているとのこと。本郷さんの70アールの田んぼ全部が伊勢錦の作付けです。伊勢錦は180センチメートルにもなる長程種ですが、出穂前140センチメートルのころにバインダーで青刈りをし、乾燥機で16時間ほど乾燥させて、やっと使えるようになるそうです。伝統工芸の継承にも心を配る本郷さんは、コロナ禍が収まったら子供たちが見学に来てくれることをとて



(撮影・執筆 蛭田元起 編集委員長)

がんばる農業者 あの人この人



JA福島さくら いわきとっくり芋赤沼生産部会

今回ご紹介するのは、JA福島さくら いわきとっくり芋赤沼生産部会です。

いわきとっくり芋は平下神谷赤沼地区で部会長の篠崎茂一さん(73)を中心に7名の生産者が27アールを栽培しています。

いわき郷土野菜の横綱にランクされ、令和元年度の出荷実績は4トンでした。

栽培圃場は新舞子海岸近くの砂質土壌で水はけのよい土地が適しており、秋冬ねぎの産地でもあります。

生産部会を昭和46年に組織

近年、栽培者の高齢化と後継者の不足から、栽培技術の継承と優良種子を残す努力を、いわき市農政流通課、磐城農業高校園芸科作物班の協力により始めました。

部会では、磐城農業高校生物工学班で、50年以上不変の種子の芽の先端(茎頂)を培養しウイルスフリー化に取り組み次世代の生産者に引き継ぐことができれば最良と考えています。

これからも篠崎茂一会長を中心に部会員一同技術の向上と後継者育成を目指し頑張っていきます。

し最盛期は30人が栽培し、贈答用に力を入れゆうパック中心に3,000ケースを出荷し、いわき中央市場を通じていわき市内の量販店にも出荷しました。東京電力福島第一原発事故に伴う風評により贈答品が激減し、現在、贈答品の販売は市内JAの直売所での販売のみとなっています。

部会活動の実績と栽培技術が認められ、これまでいわき市農林業賞(平成22年度)、東北農政局長賞(平成26年度)もいただきました。



(撮影・執筆 新妻信夫 委員)

農地流動化情報 Vol.50

農業委員会では、耕作を目的とする農地情報の収集・提供を行っています。売買・貸借等の意向がある方は、是非ご相談下さい。

◆売りたい

No.	農地の所在地	地目	面積(a)
1	平泉崎字上河原 (1筆)	畑	5.04
2	平泉崎字岸前 (1筆)	畑	5.01
3	平泉崎字根城町 (2筆)	畑	7.91
4	常磐西郷町大夫 (2筆)	田	7.07
5	川部町成作 (1筆)	田	10.69

◆貸したい

No.	農地の所在地	地目	面積(a)
1	沼部町釜ヶ淵 (5筆)	田	25.80
2	山田町滑沢川原 (3筆)	田	34.74

詳細を知りたいという方は、農業委員会事務局までお問い合わせください。



お問い合わせ 農地調査係 ☎(22)7574



その表彰式が、11月11日に福島市で開かれた県下農業委員会大会の席上で行われました。当日は福島民報社の関根英樹事業局長から表彰状が授与されました。



「いわき市農業委員会だより」187号が福島民報社長賞に選ばれました。

県情報誌コンクール福島民報社長賞受賞

平2区



しの まさあき
宍野 正秋

四倉・久之浜・大久地区



さかい くにお
酒井 邦夫

内郷・好間・三和地区



さんど ごうし
三戸 豪士

内郷・好間・三和地区



さとう としはる
佐藤 智春

農地利用最適化推進委員は、4名が欠員となっていました。この度、左の方々が新たに選任されました。任期は令和3年9月1日から令和6年7月7日までです。

新たに農地利用最適化推進委員が選任されました



野焼きを行う際の注意事項

生産振興課から

例年、米の収穫期～1月頃にかけて水田等で野焼きの現場が散見されており、現場の周辺住民等から煙や異臭等、多くの苦情が寄せられています。

野焼きの中でも、稲わら等の野焼きについては、例外的に認められていますが、前提として周辺地域の生活環境に与える影響を少なくする必要があります。つきましては、野焼きを行う際は以下の3点に十分ご注意ください。

- ①煙、異臭、灰の飛散等、周囲の迷惑とならないよう、周囲の理解を得た上で行う。
- ②火災の危険性が高まる時期や、周囲が不審に思う時間帯を避けるようにしてください。また、必要に応じて事前に所管の消防署・消防団などに連絡してください。
- ③すぐに消火できるように事前に消火用水などを準備してから行ってください。

トピックス

正月の初詣は、新年を迎えるにあたって家族の安全や健康を祈ると共に、参拝者それぞれの心身のリセットの機会となっております。

神社等で春秋に催される祭も、農耕における豊作や疫病退散の祈願等の本来の目的とは別に、地域のイベントへとその性格を変えながら今日まで続いています。

しかし、有志によって伝えられている祭礼における奏笛等の技能は、担い手不足によって次第に廃れつつあります。

これらの伝承文化の継承は、同じ地域で生活する農業者と他産業従事者との交流の機会ともなり、これを廃れさせることは地域文化の継承や住民の相互理解の機会をも失うこととなり、農業の衰退を加速させることに繋がりがねません。

そこで泉・渡辺地区においては、これらの伝承文化の継承を目的として、奏笛伝承講習とその能力認定等についての事業を行うNPO法人立ち上げの機運が高まりつつあり、奏笛伝承の取組みが始まろうとしています。(執筆 田子耕一 委員)

令和3年10月山田町で農地中間管理機構関連農地整備事業の安全祈願祭が行われ、井上用水堰土地改良区の蛭田和夫理事長や山田地区ほ場整備組合の蛭田一栄組合長などが鍬入れをして工事の安全を祈りました。



(写真提供 安島美光氏・執筆 蛭田元起 編集委員長)

工事発注者は福島県いわき農林事務所事業面積は約47ha、令和7年の事業完了を目指しています。



「お正月飾り」の準備で大忙し

今回は、JA福島さくらが運営する野菜直売所で販売する「お正月飾り」の制作現場を訪れました。

製作するのは、四倉町葉王寺在住の植田正則さん。

稲刈りが終わって少しひと段落する暇もなく、すぐに刈取りした稲わらを乾燥させ一番良い状態になり次第、正月飾りの下準備に取り掛かります。

少しでも安く提供するため、部材の確保は、郡山まで足を運び購入してくるそうです。玄関に飾る正月飾りだけでなく、依頼があれば、注連縄(しめなわ)や門松も手作りしています。

手作りの良さが感じられる、すばらしい門松ですので、JA各支店へ足を運んだ際にはぜひ、ご覧ください。



(撮影・執筆 岡村泰典 委員)

編集後記

令和3年7月よりいわき市農業委員会が新たな体制になり、編集委員会も新体制となりました。

年々、農家の高齢化による人口減少という現状を理解し、農業の持続的発展のために「農地利用最適化活動」を中心に、農業委員及び農地利用最適化推進委員が、お互いの役割や特性をいかし取り組みながら、今後も農家の方や農業に関する役立つ情報をお届けしていきたいと思えます。

今、日本ではあらゆる産業に携わる人たちが、労働人口の減少という課題に直面し悩んでいます。過疎化、高齢化、担い手不足、遊休農地の増大、異常気象や災害による農作物の被害・・・さまざまな問題が深刻化している農業も例外ではありません。

そんな中「スマート農業」の普及が進んでいます。スマート農業は労働を省力化したり、栽培技術やノウハウの伝承に役立つったりと、課題解決に重要な役割を果たしています。しかし、導入コストの高さ、新たな技術を使いこなせる農家の育成など、課題は多々あるようです。

編集委員

- 蛭田元起 編集長・生田目祥明 副編集長
- 志賀 幸・田子耕一・岡村泰典
- 菅野 綾・新妻信夫

(執筆 志賀幸 委員)